

普及指導員調査研究報告書

課題名 ブドウのクビアカスカシバ防除による生産安定支援

農林事務所名 周南農林事務所 担当者氏名：弘中 泰典、磯部 敏之

＜活動事例の要旨＞

近年になってブドウに深刻な被害をもたらすようになったクビアカスカシバの防除対策に取り組んだ。

1 普及活動の課題・目標

活動対象である「須金ぶどう・梨生産組合」は、組合員 12 戸で観光ブドウ園 16ha が栽培されている。近年になってクビアカスカシバ幼虫（図 1）の食害によりブドウ樹が枯れる事例が顕著となってきた。

成木となったブドウ樹が 1 本枯れると、標準的な WH 型整枝の樹では 64 m²程度の結果面積が減少することとなり、再び果実を収穫するためには苗木から数年の生育期間が必要となる。このように深刻な問題が各園地で何本も発生する事態となってきたため、クビアカスカシバの被害対策に取り組むこととした。

2 普及活動の内容

（前年度までの活動）

クビアカスカシバは国内のブドウ主産県で問題となりつつあるが、発生生態など未解明な点が多く、県内でも詳細が確認されていなかった。また、登録薬剤が 1 剤しかなく、その効果的な防除時期を確認するためにフェロモントラップを設置して成虫の飛来時期を調査することとした。

フェロモントラップは高さ 1 m 部分に 3 園地に設置し、6 月から 8 月にかけて生産者にトラップでの誘殺状況を毎日確認して記録してもらい飛来時期を特定することとした。調査の結果、6 月 11 日に 1 頭の成虫が初めて誘殺されたため（図 2）、6 月 13 日に生産者に向けて、薬剤防除等について情報提供し対策を取るよう注意喚起した。

その後、6 月 17 日、7 月 13 日、30 日、8 月 6 日に各 1 頭が誘殺されたが、ある時期に集中して誘殺されるわけではなく、また、予測していたよりも誘殺数が少ない結果に終わり、防除時期を一時期に特定することはできなかった。

各園地の被害状況を調査したところ、フェロモントラップに誘殺された数は少なかったものの、全園地で被害が確認されたため、農林総合技術センターと共同で防除対策を検討し、以下の対策を検討することとした。

- ① その後 1 剤が追加登録され 2 剤に増えた登録薬剤の防除効果の確認
- ② 光反射資材の樹幹への被覆・樹株元被覆による産卵防止対策
- ③ 粗皮はぎによる薬剤防除効果の改善
- ④ 中耕による土マユの削減
- ⑤ 情報提供による捕殺の推進

（平成 25 年度の活動）

① 2 剤に増えた登録薬剤の防除効果を確認するため、感水紙を樹株元（地上高 20cm）と棚面（地上高 150cm）に設置し、スピードスプレー（以下 S S）から噴出された薬剤が樹に散布されているか調査すると、棚面にはよく薬液が付着しているが株元への付着が少ないという結果が示された（図 3）。このため、改善策として横向きノズルが下向きに下げられる S S の所有者は下向きに角度を下げ、また下向きにノズルが下げきれない S S を所有している生産者は、上向き用の噴出量の多いノズルを横向き方向にも取り付けて少しでも

株元に薬剤が散布されるよう検討してもらった。

薬剤試験区では、これまでに食害されたことのない樹から新たに被害にあう樹はほとんどなく、薬剤防除はある一定程度の効果はあったのではないかと推察される。しかし、薬剤試験を実施した2剤について効果の違いを判別できなかった

②光反射資材を使用した産卵防止の試験区では、樹幹に巻き付けた区では被害はほとんどなかったが、樹株元地面に被覆した区では一部被害が見られた。

③粗皮はぎによる薬剤効果の改善の試験区では、粗皮はぎしていない区に比べて被害の発生が少なくなっており、産卵しやすい樹皮の隙間が減ったことや薬剤の付着が改善されたことが推察された。

④冬期の中耕による土マユ削減対策は、土マユ自体に弾力性があるため少し中耕した程度では土マユが破れないこと、中耕による労力によって得られる防除効果が労力に見合うほどは得られないことなどから、中耕による土マユの削減対策には取り組まないこととした。

⑤全ブドウ園にクビアカスカシバの成虫、幼虫、被害時の虫糞発生の様子（図4）などの資料を情報提供したことにより、栽培に関わる雇用労働者などの関係者にも被害が認識され、虫糞の発生を確認すると捕殺されるようになった。しかし、この時期はブドウの袋かけ作業、摘房作業と作業が重なってくるため、捕殺作業に限界があった。

3 普及活動の成果

- ・被害に関する情報を広く提供したことで被害発生時の虫糞の出方について理解が深まり、捕殺作業が各園で実施され、多くの樹で被害の拡大を食い止めることができた。
- ・薬剤散布では完全に被害を防ぐことはできなかったが、SSによる薬剤散布方法の改善もあり、新たな被害樹は減少した。
- ・粗皮はぎを実施した区では幼虫の発生が少なくなることが確認された。

4 今後の普及活動に向けて

- ・今回一定の結果が見られた粗皮はぎと薬剤散布の改善を積極的に普及する。
- ・捕殺した箇所でも数日後に確認すると再度虫糞が発生して食害されているケースもあったことから、定期的な捕殺作業を推進していく。
- ・結果がはっきりしなかった光反射資材を活用した防除対策の実証試験を実施する。



図1 クビアカスカシバ幼虫



図2 成虫（体長約4cm）



図3 薬剤散布の様子



図4 虫糞発生の様子



図5 発生生態のイメージ